

「墓碑銘」とは誰の名前か：
小島信夫「墓碑銘」をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-09-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 足田, 雅昭 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1900

「墓碑銘」とは誰の名前か

——小島信夫「墓碑銘」をめぐる

疋田 雅昭

0

小島信夫『墓碑銘』⁽¹⁾は、日本人とアメリカ人という混血の人物、トーマス・アンダーソン⁽²⁾ 浜仲富夫が日米開戦を機に日本の兵士になりレイテ戦で玉碎するまでの物語である。

原隊は壊滅したものの富夫は物語の最後まで死を迎える場面が描かれることはない。だが、語り手は富夫自身に思われ、その体験を手記として描かいている様相そのものが語られるため、北京の情報部隊に転属となることでレイテ島玉碎の難を逃れ日米安保条約改定時の時から戦時を振り返る小島自身と重ねられることが多い。

小島の初期には多くの軍隊小説と称すべきものがあるが、これらは『抱擁家族』に代表される、後の家族物語群の影にかくれあまり論じられてこなかった面がある。数少ない批評の嚆矢となった江藤淳は、浜仲の混血という設定そのものを「寓話的」「観念的」ととらえ、それを小島の感覚的な把握とは対立的な

ものであるとみた⁽³⁾。千石英世の「極私の次元からの捉え直し」や柿谷浩一の逆接的な設定による一個人の「悲劇や苦悩」が反転し「戦争」の「おかしさ」を描き出しているという評言⁽⁴⁾は、非現実的な設定と体験から来るリアルな描写という背反する要素をどのように一つの作品に落とし込んだかという観点において通底している。

村上克尚は、この小説にこれまでの「軍隊小説」とその後の「家族小説」の結節点を見出し、個人が軍事化するメカニズムをシステムからの力と個人が能動的に参入してゆく様相の共犯関係として抽出し、そこに動物や女性を都合良く搾取、利用してゆくホモソーシヤル的、人間中心的な側面を指摘している⁽⁵⁾。数少ない批評的言説の中で、村上の分析は精緻かつ細部にわたっており、今後の小島論の一つの指標となつてゆくことは間違いない。

本論は、『墓碑銘』の浜仲があるいはその世界観が後に問題作『寓話』⁽⁶⁾に、そして最後の長篇となった『残光』⁽⁶⁾にと何度も召還された意味をテキストから探つてゆくこととする試みで

ある。それは、先にあげたロマン主義的とも言える設定（創作）とリアリズム的描述（事実）という「背反する要素」の折衷をめぐる問題系でもあり、小島にとって小説とは、テキストとは何かという問題系でもある。

1 アメリカ人租界の「外部」

私は小学校も中学校も、アメリカ人のミッシェンへ行つた。私は一見するとほとんどアメリカ人と変らないし、トーマス・ハマナカというかわりに、トーマス・アンダーソンとよばれていたうえに寮にいたので、私の友人は、私が日本人の血を半分うけていることには、誰も気がつかなかつた。そこで私には女友達ができしたが、私には半分の血である日本人の方の血を、完全にうけている妹が忘れられなかつたのである。

(8)

物語は手記の体をとっており時々語り手の執筆中の意識が全面に現れることすらあるのだが、語りの現在は最後まで不明確だ。アメリカ人の父と日本人の母との間に生まれた浜仲富夫の見た目は、アメリカ人にしか見えない。富夫は、自らの出自を隠しアメリカ人租界のミッシェンスクールで寮生活を送っていた。そんな浜中の日々はパール・ハーバーの奇襲による日米開戦で突如変容してしまう。

白人の租界には日本軍があちこちに立っていた。もはやディックの家にも日本軍が入っているかも知れない。そして租界の出口には、日本軍が警備しているかも知れない。もしそうだったら自分は外へ出ることが出来るだろうか。自分はこの連中といつしよに収容所につれて行かれるかも知れない。

(21)

租界の外部に出ることが出来ないのと分切り切っていた友人・ディックは不安だけが高じてゆくわけだが、一方で富夫には租界の「外部」に出る伝がある。それは、アメリカ人租界で世話になったアンダーソン氏であり、富夫の母および義理の父親である。

アメリカ人「租界」とはいうまでもなく昨日までは暮らしていたアメリカ人たちにとっては「内部」世界である。だが、パール・ハーバー以後、この世界は封じ込められて、日本人たちの異質な「内部」とされた。学校が社会によって承認された「内部」であるのだとすれば、日本軍によるミッシェンスクールの接収とは、富夫たちにとって二重の侵犯を受けたことになる。

そして、租界の境界線は、ディックやアンダーソン氏の越境をはばみ、富夫だけをその外部へ誘う。むろん、その「誘惑」を発生させている対象 a (J・ラカン) とは、母や父ではなく、その彼岸の妹に他ならない。だが、父や母がここで「証明」しようとしているのは、自分達が同じ「日本人」であることであり、接収に戸惑うディックに対する不思議な怒りの感情も、富

夫の日本人であるという意識から呼び起こされていることを見逃してはならないだろう。だからこそ、日本人の妹を奪う軍人という妄想には怒りを覚えつつも、アメリカを接収する日本には何も感じてはいないのである。

昨日までの富夫は境界の彼岸に自らの居場所を見出していた。言うまでもなく、富夫たちの世界を飲み込んだのは、日本(軍)である。だが、皮肉なことに、その包摂こそが、自らの外部の存在を富夫に気が付かせ、そして「外部」に誘うことになった。出たいという欲望は、閉じ込められていると言う自覚からしか発しえないからだ。

そう考えれば、富夫は見事に「外部」に出られたのだろうか。ならば、なぜ富夫はあえて軍人にならねばならなかったのか。

2 日本人租界という「内部」

私はそんなふうに思った。あるいは、思おうとしたのかも知れない。

私たちは洋車にのって、日本人租界へ向った。私が領収書を手すてたとき、父親は、車の上から私をふりむいた。(26)

ドイツに対しては何の感慨も湧いてこない。ここには村上が指摘する様な「特権的な差別を正当化された特権的な主体への同一化の欲望」があることは間違いない。己の心の裡を見つめるうちに、それを富夫は他者の了解不可能性というより普遍

性の高い議論にすり替える。了解不可能な他者とされたドイツと同様に、ミッシェンスクールと富夫を結ぶ紐帯である「領収書」は、迷いなく洋車から捨て去られた。

「ねえ、お父さん、この子に国民服を作って早く着せなくっちゃ。それに帰ったら、日本人の人に早く、富夫のことを知らせなくっちゃ。かくしてはダメだわ。今までとは方針をかえなくっちゃ。いつまでもビクビクしてたんでは、本人が可哀想よ。良子だってこまっちゃまわよ。ねえ、バリケードの兵隊さんはあれはしかたがないけど、みまして、今の兵隊の眼を。ああこわいこわい」

「服のことは分っている。わたしのいうことは、そういうことじゃないんだ」 (28)

母親はあくまでも富夫の見た目の問題に固執しているが、父親あるいは富夫の思っていることはもつと根源的なそれである。父親が考えていることは、もし富夫が兵隊にとられるのなら、どう逃すかと言うことだが、それ以前に、富夫が日本の兵隊になると言うことが現実的なこととは思えない。しかし、それなしに、富夫が日本人の租界で生きていける道があるとも思えない。

一方で富夫の心配はこうだ。日本が勝つのであれば、自分は妹と離ればなれにならなければいけない、だが、日本が負けるならば、妹はどうなってしまうのか。いずれにせよ、この時点で

富夫の頭の中には、己の窮地を救ってくれた父や母のことは眼の中にない。

確かに、富夫は楊にもディックにも不可能な越境を成し遂げはした。しかし、それは己の世界を内包した権力側のより「内部」の世界へ闖入したことを意味する。富夫は決して「外部」に出られたわけではない。軍とは、権力システムのより「内部」の世界のことである。そう考えれば、富夫は更なる「内部」へ向かっているのである。

3 犬／馬

日本人租界とアメリカ人租界、もしくは日本人租界と中国人租界。こうした境界における象徴は「軍曹」であるが、富夫にとっては、それ以上に彼が連れている「犬」の方が重要である。

「よし、よし、吠えるんじゃない」

私の前に、いつかの軍曹が犬をつれて立っていた。私たちの前で犬の話がはじまった。

犬は私を見て吠えつづけた。

「よしよし、太郎、よし」

軍曹が背中をなでてそういつたが、犬は静まらなかった。江口がきいた。

「犬をいつも連れて歩いているんですか」

「自分の任務ですよ。例の租界の中を警戒するのでね。あ

の中の連中の臭いには敏感なんでね」

(42)

犬は言うまでもなく嗅覚の鋭い動物である。富夫の犬に対する嫌悪感はこの嗅覚の鋭さに起因するものであるが、一方で富夫は自身の臭いにも敏感である。

私はそのとき、ふと自分にも信じられぬことをした。私は自分の家へ帰ると、いつも、自分のワキガをかいでみるくせがある。私は泣いていたところなのに、その動作をする気になったのだ。私は臭いをかいた。そしてまた、天井を見て目をつぶった。私がかいた汗は正直に臭いとどめていたのである。

(32)

富夫が「臭い」によって自覚する自らの身体は、母からの視線を内面化しているため、常に否定的なそれである。その自己忌避とも言うべき状況は、妹に対して己の身体を恥に感じる感情と結びつく。さらに、自らの身体性を否定的に定義する「臭い」は、それを「発見」してしまう犬に対する恐怖に繋がる。

また犬は、映画の出演を依頼する場面、父親にその事実を告げる場面、中国人租界から帰宅する場面など、物語展開上重要な場面に現れる。

「お前、いつかの男だな。よくあうじゃありませんか、おや、早速、服だけ変えやがった。おや頭も坊主だぞ」

その兵隊は叫んだ。私は見おぼえのあるアメリカ租界のそばにきていた。懐中電燈がいくつも円を廻転させながら近づいてきた。

「太郎は何を見つけたのだ」

「太郎の鼻に狂いはないわ、御苦労だったな」

(58)

とその兵隊はいった。

服を変え、髪を刈り、剣道を習った。しかし、何をしても「日本人」にしてはもらえない。そのやるせなさが「眠れなさ」という形で現れる。眠れなくなった富夫は街を徘徊する。いつの間にか中国人租界で飲んでゐる。かつて「眠る」ことは、富雄にとつて自らのアイデンティを回復出来る数少ない安定の時空であった。

私は眠りにおちこむときは、本来の自分に返つたような安らかさをとりもどさぬことは、一度もなかった。はじめてアメリカ租界から引き上げてしまった夜でさえも自分の中にかくれこむように眠った。泣いても笑つても私は私だ。その「私」の中におさまることができた。物心つかなくかつた頃の私とおなじものが、私をつつんで休ませてくれたのだ。

(49)

だが、日本人租界における日々は、富夫から睡眠時の安定すら奪い取ってしまった。眠れない日々が富夫を中国人租界に導

いたのであるが、それでも「犬」は、どこにも所属出来ない異邦人としての富夫を「発見」してしまう。軍曹にけしかけられた犬は、執拗に富夫を乗せた中国人の車を追いかける。

私は自分が人間だ、と思つていたから迷つていたので。もはや私は苦しむことはない。私は一匹の犬だ。死にたくないから生きるだけだ。しかしほんとにそう思うには、犬の顔が生き生きしすぎている。

(59)

犬は吠え追いかけてそして襲いかかる。しかし、犬が対象となる人を区別しているわけではない。犬は人の「差別」意識によつて走らされているだけだ。もちろん、生きるためである。犬の中には「差別」意識はない。だが、人は犬に同化することは出来ない。犬は結果的「差別」を補完する。

だが興味深いのは、富夫はそうした己を迫害する「犬になりたい」と夢想してしまうことだ。犬は人間ではない。しかしながら、権力には与する存在である。空虚なアイデンティティは、権力側の欲望を充填することによつて己の位置を成立させようとする。

小島の小説ではしばしば「犬」とともに「馬」が現れる。両者ともに人と縁の深い動物ではあるが、小島の小説では「人」との関係において主従の逆転の比喩として機能することが多い。

沢村は馬にかけては玄人で、菓子屋に奉公に出たが、もと

もと内地の馬力の息子で、こうしたパンパには馴れきっていた。彼は馬の顔を見ながら、近よると首をたたいてやり、何か口でいいながらあつという間に片脚をつかむと、早く鉄ベラを持ってきてほじくるようにと私にいった。いつまでも彼に脚をもたせておくわけには行かない。昨日は大ぜいいっしょに馬にさわっただけであつたが、今日からは、気心のまつたく知れぬ朝丸の脚を自分で持たなくてはならない。私はさっきの班付上等兵の「脚」の失敗を思いうかべ、自分銘たちが人体のこの部分に因縁のあることを今更のように知つた。

(105)

犬が外部からみた軍人の象徴であるのならば、馬は富夫が内部から見た軍人そのものである。

馬に見習うようにせい。馬は五十貫の器材をかついで歩けるが、お前たちにそれができるか。馬より早く走れるものは手をあげてみい。馬よりよけいに飯をくえるものは手をあげてみい。誰もいないだろう。馬よりすぐれたものは、お前たちの中にはいない。(中略)こんど生れかわつたら馬に生れてこい。

(107)

この言葉は富夫に深く刺さる。この富夫の心情を理解するには、以前に富夫が「犬」になりたいと思つていたことを想起する必要がある。

「いや、朝丸はおれよりえらいな。どんな馬でも下士官ぐらしいことはあるよ。何しろ朝丸だつて四年奉公しているんだし、太原作戦では山の中で苦勞して功績をあげたんだ。朝丸はそのときのことを口でこせいわないがよくおぼえているよ。朝丸はなかなか、お前たちのいうことはきかないよ。しかしお前たちがよくそのことをわきまえて世話をすれば、すぐおとなしくなるよ。初年兵のクセにいばつたりしなければ、何とかなるよ。なぐつたりしてはいかん。人間とちがつて馬はなぐつてもよくならない。おこらせるだけだ」

(124)

軍の外部に居た時、「犬」はアメリカ人でも日本人でもない存在。つまりは「人間」ではないのにも係わらず、境界の存在を見出すことが出来ることによつて有用となる存在。富夫にとつて「犬」は、「人間」の役に立つという一点において憧れの存在であつた。

むしろ、軍の内部であっても、「馬」も「動物」であり「人間」ではない。だが、戦地においては「人間」以上に有用な存在だ。戦地では「馬」は「初年兵」以上に貴重な存在とされている。上官の馬の脚をとつて洗おうとするエピソードは、ここを踏まえて理解する必要がある。「馬」の役にたつことは、上官のための「仕事」で認められることと同義なのである。

支配／被支配という権力構造の中で、その狭間にある存在は、

己の存在の空虚さに耐えられない。また、たとえ支配者側にあつたとしても、内部は更なる支配構造によって区分され続ける。そこで夢想されるのは、被支配者側の存在を捏造し支配者側の権力を内面化することである。権力とは、こうした内部へ微分化してゆくシステムとして普遍化し増殖してゆくのだ。

4 映画／現実

富夫は軍から映画の制作を手伝うように依頼される。アメリカ人が中国人に対して乱暴を働いたのを、日本軍人が助け、中国人に感謝されるという内容の映画で、明らかな教化映画だ。もちろん、教化の対象とは中国人であり、これを観たアメリカ人には憎悪の感情しか浮かばないだろう。だが、映画には加害者を演じるものが必要であり、演劇等に比べより写実的である映画の場合、日本人がこれを代理することは出来ない。その意味で富夫はうってつけの存在であった。

アメリカ人租界の交渉役はアンダーソンであった。かつて被支配世界から支配者のそれへ富夫を送り届けたのもアンダーソンであり、そして二人は支配、被支配のそれぞれの代表として再会したわけだ。対立する利害を背負う二人の「親子」は、ここで同じ聖書の一節を想起する。「マタイ伝」十卷、「迫害の予告」と称されている場面である。

視よ、我なんじらを遣わすは、羊を射狼の中に入るる如し。

この故に蛇のごとく慧く、鶺鴒のごとく素直なれ。人々に心せよ。それは汝らを衆議所に付し、会堂にて鞭たん。また汝らが故によりて、司たち王たちの前に曳かれん。これは彼らと異邦人とに証をなさん為なり。かれら汝らを付さば、如何なるを言わんと思ひ煩うな。(67)

富夫は、アメリカ人たちを犠牲にしたが故に彼等から憎まれる。それでも、『聖書』は富夫を赦されるべき存在とする。しかしながら、富夫は日本人たちに受け入れられているわけではない。そこでもまた、責められつづける。富夫がなぜディックや楊をこの映画に呼んだのか、それは分からない。これまでの行動原則に照らし合わせると、彼等が日本人に喜ばれるようにするためであろうか。

いつかミッシヨンにいたときだった。ディックと私は中国人の服装をし、面をかぶって中国の歌をうたいながら、中国人そっくりに踊りを踊ったことがあった。私たちが面をぬいだときに、ディックは楊という中国人の学生にいった。「そっくりだった?」

「そう。そっくりだった。しかしいま、きみたちを見てみると……」

「そっくりに見えてくる?」

「いや、……まあどうでもいいんだ、そんなこと」

(38)

デイクと私はかつてふざけて中国人を「演じ」あった。楊からみれば、その時の富夫はデイクと同じ側にあつたわけだ。ミッシェンスクールにおいて、それは「自然」なことに思えたかもしれない。しかし、楊は富夫を自分たちの側に居る人間であると思つていた。

「トミイ、僕は前から知つていたんだ。一度僕は君が租界を出たとき、あとをつけたことがあるんだ。僕にはね、君が、僕たち黄色人種の血をうけていることが、わかるんだよ。少なくとも僕にはわかるんだ。アメリカ人や、君の国の人より、僕の方がよく君のような立場の人にはなれてゐるからね。（中略）僕は、カトリックだものね。君はデイクなんかより僕らに近いんだよ。早くこれを食べるよ」
(54)

かつて眠れずに中国人租界の楊の店で飲んだ際に、言われた言葉である。デイクが楊について富夫に語つた言葉は対照的でもあり、一方でその構造には相同性があるとも言える。

「しかし、きみは楊と仲よくした。中国人の楊とたしかに仲よくしたんだ」

「中国人と僕がほんとに仲よく出来ると思うの、きみは。僕はアメリカ人だぜ。つきあつてやらなければならんんじゃないか、分るだろう」

デイクも考えすぎしたが、私もいいすぎであつた。しかしデイクは、それで安心したようにおとなしくなり、すまなかつた、といった。
(48)

これらの会話は、名前を伏せさえすれば、富夫をめぐる男女の三角関係の様にも見える。だが、ここでしばしば現れる「好き」という言葉は、そして彼等が置かれてゐる状況は、ジェンダー的な対照性を完全に超越しているように見えるが、事態は逆である。形式と意味における性の対照性は実は補完的構造であつて、しかも、前者は後者を内包している。

人種の対立は、内部にあるジェンダーのそれを内包し隠蔽し、それらをホモソーシャルの物語として先鋭化させてしまう。英語も中国語もそして日本語をも解する富夫の帰属は、本人のアイデンティティの問題のみならず、アメリカ人と中国人という対立をも可視化させている。それも、ヘトロセクシャル的な比喩性をともなつた形で。

チョビひげを生やした富夫が、事務所の奥においてある食糧のバイを盗み出す楊を解雇する。楊には病気の母親と妹がいるが、楊が富夫の使用人であるデイクに道で会つて、お前たちは、この国を自分のものにしてしようとする大盗人ではないか、というところ、デイクが腹を立てる。そして楊に食つてかかるところへ、日本軍人が通りかかると、楊の味方をする。それをきいて富夫がその軍人を罵倒し楊につかみかかると、かえつて打撃されるというのが、出来上がった映画の筋であつたが、結果的に

三人は日本人の教化映画を演じるしかなかった。だが、現実の租界地域において、楊やディックに演じない生活などなかったはずだ。中国における中国人租界とは一体何か。アメリカ人租界における学校に通う中国人とは何か。

それは、もちろんアンダーソンも同様である。アンダーソンと富夫の間に交わされた会話における彼等の自己規定は「道化役」である。「道化」もまた「役」なのである。日本の実効支配が広がる中国において、租界における立場も日々変わってゆく。生きるためには適応しなくてはならない。次々に変化し続ける「役」を演じ続けなくてはならないのだ。

「演じる」とは、本来はそうではない者（外部）によってなされる行為である。演じる必要もないものこそ真の「内部」なのだ。「外部」であるからこそ演じなくてはならない。日本人による教化映画の制作は、「演じる」ことの特異性を脱構築し、租界における全ての日常生活が強制的に演じられていることを逆説的な形で可視化させている。だが「演じる」ということは、混血の富夫にとっては、より根源的なことである。物語ではパール・ハーバーの奇襲（日米開戦）が富夫以外の人物の生活を一変させることになっているが、富夫にとってアイデンティティの追究は、それ以前も以後も、常に生きることと同義なのである。富夫には零度でいられる（と思ひ込むことが出来る）空間など存在しない。

5 軍を「演じる」ということ

映画での富夫の「功績」は認められて、軍に徴用されることになった。富夫は家族や周囲の状況を鑑みた結果として入隊を「選択」したように思っているが、むしろ、実際の「徴兵」は「選択」などではない。だが、家族にせよ、周囲の日本人にせよ、異質な内部の他者である富夫をもてあましており、その帰属先は「軍」でしかなかったとも言える。「軍」からすれば、兵隊とは表向きは、「徴兵」されるよりは「志願」するものである。

早く志願しなければ、日本人と思われぬ、というふうに考えていたが、チヨウヘイとは……と、はじめてその意味がわかったように思えた。私はとくべつとして、多くの青年たちが、ひっぱられると知りながら、志願し、よろこび勇んででもいるように、この世界へ入ってくるのは、いったいあれは何であつたのだろうか。私の父は、あれは何であつたろうか。私といっしょに剣道をやった連中は、あれは何であつたか。そしてここにいる青年たちは。(74)

だが、富夫は日本人の「表向き」が、「演じる」ということが理解出来ない。「よろこび勇んでいるように」演じていることが理解出来ないのである。一方で、富夫は「演じている」という一点において、他の兵たちの間にある種の同質性を感じて安心している点にも注目しておくべきだろう。このことは、富夫が結果的に日本軍の状況に適応出来てしまうことと無関係ではない。徹底的に演じることは、素であること（演じてはいな

いこと」ととの差を無効にしてゆくからである。

他と一丸となるために身体でそれを示すこと。例えば、皆で日本の歌をうたうこと。全体の効率をあげるために自らの役立ち方を常に他者と競い合いに見出すこと。例えば、自ら仕事を見つけそこに素早く従事し、その姿を周囲に見せつけること。軍では常に個を捨て全体のための「個」を「演じる」ことが重要だ。

「服屋にきたような顔をするな。一度は着てみるものだ。着てみたか。着てみない？ せっかくちゃんと日本の兵隊さまが着れるようにしてくれたのに、着てみないのか」

とその兵隊はいった。しかし彼は私に着てみさせる気は毛頭なかつたことが分った。

「着てみるやつがあるか、服が破れるだけじゃないか。よし、一号をとったもの手をあげい。その者は出てこい」 (72)

最初の軍の洗礼は、軍服に関するものであつた。適合するサイズがなかなか見つからなかつた富夫は、結果的に一番立派な身なりとなつてしまふ。軍服は機能的には兵がそれを着るものであるが、実際には天皇から「恩給」されるものである。象徴的には、軍服が人を兵にするのである。見た目が立派な日本軍人となつてしまったことを、表層的には「日本の軍隊」の「親切さ」としながらも、その様相には驚きを隠せない。「外部」の異質なものは、内包された途端に、「内部」の他者同士の差

異となつて現れる。

この服のエピソードは象徴的である。軍内の規律、しきたりは、常に内部であることの「証明」として現れる。

私は脚をねらつた。彼の脚は森に占領されていた。彼はかがみこんでかいがいしく班長の片方の脚から、両手をつかしながら非常な速度でといていた。脚絆はその二つの手の中をいったりきたりしながらだんだん束をふやして行き、前後に、といつても物の二十秒もたたぬうちにそっくり彼の手の中におさまってしまうのである。しかしもう一つの脚がまだあまつていた。 (121)

結果的にこの「脚」への試みは失敗に終わるが、馬の「足」と同様に、富夫はすぐに「脚」へのアクセスに成功する。班長に関する「仕事」は自ら見つけなくていけない。そして、それは早い者勝ちであり、その「仕事」の「過程」ははつきりとアピールされなくてはならない。少なくとも急いでいることを示す必要がある。「駈足」とはその象徴である。

「班長」を初め上役とは出世した己の姿そのものである。軍にいる誰もが「出世」の力学を疑わない。「出世」するには「仕事」を見つけ、その姿を通して認めて貰うしかない。日本人の兵であればそう考えるだろう。しかし、富夫が認めてもらいたいのとはそこではない。富夫が望んでいるのは「日本人」「日本兵」との同化である。

だが、組織はいつも富夫を内部の他者としてしか扱おうとしない。他の日本人の「目標」とさせたり「特別」の処遇を与え続けようとする。にもかかわらず、それを組織からの「恩恵」の様に示す。富夫は、こうしたシステムの外部に出ることが出来ない。

また、勅諭の暗証も軍隊の象徴だ。ここで描かれるローマ字に直された勅諭は、意味を剥奪された浮遊するシニフィアンに見える。だが、上等兵の言う「筋なんてものはない。小説ではないんだ」という台詞は、勅諭とは誰にとってもそういつたシニフィアンであることを示している。日本人だから勅諭を覚えているのではない。勅諭を覚えていることが日本人なのだ。

「勅諭はおぼえたか」

「ハイ」

「最初の部分をいつてみい」

「ハイ」

私は馬小屋のことが気になりながら唱えた。

「よし、もうよし、時間がないからそのくらいいいい。ローマ字でおぼえたにしては、発音が正確だな。隊長の面子上にかけても、よくおぼえてくれなくてはこまる」 (122)

また、組織による勅諭の暗証の強制も、結局は富夫を日本人にしたりはしない。組織あるいは上官の心の広さを示す指標として利用されるのみである。

演じることは、真実を隠すことあるいはうみだすことである。だが、軍が要求する演技とは、演じてはいないレベルにまで演じ尽くすことである。それは、富夫にとって日本人を演じ尽くすことと同義である。だが、富夫の演技はどこまでいっても見事な「演技」でしかない。

ペルソナを被ることは社会参入するための必須事項である。だが、それは被っていないという体を互いに保証し合った内部システムにおいてのことに過ぎない。外部であること（演技する役者であること）を忘れては貰えない富夫は、どんな演技も見事な演技として再び、境界に押し戻されてしまうのである。かといって、もちろん、境界の外部に出ることも許されていない。

6 内包仕切れない組織

映画班のくるということは、こんなふうにかえて、私にあの映画の中のように、中国人や日本人をしいたげ、奴隷にしたいという、気持をおおっているのは皮肉であった。私はこのごろ又もや、日本軍がまんならなくなってきたのだ。スパイになってやりたい、という心さえ自分の中に住みはじめているのを知って、私に吠えかかったあの犬の意味のみこめさせした。それがこうじると、私は良子を凌辱したいとさえ思っているらしいことに気づいた。言語道断であるが、言語道断といえ、すべてが常軌

を逸していることであつて、私がここにいることが既にそのうなのだ……。(145)

かつて出演した映画『参謀と兵隊』の上映が近づいて来ることは、徐々に己を受け入れない軍への忌避の感情をわきおこしてゆく。

私は今まで逃げる方法というものを少しも考えてはいなかつたのは、おかしなことであつた。常識で考えたら、逃走ということは考えられない。城壁は守るために作られたものだが、そればかりではない。この中から外へ逃げることができぬようになつてゐるのだ。(164)

そうした中で兵長の以下の言葉が放たれる。

「アキ子をあそこへつれてこい。おれに考えがある。いいか、隊長や下士官がデタラメをするなら、こつちにも考えがある。トミイ・アンダーソン二等兵に女をあてがえ、いいか、その代り、トミイよ、ほんとにおれにお前の妹を世話せんかの。この男はあの時の慰問団のフロタキだつた。あの子はいい子だの」(170)

富夫はこれらの女と交渉をもつことはなかつたが、かえつて妹の存在が強く意識されてしまうことになる。「僕はお前がた

だの妹に思え得ない。お前を自分のものにすれば、僕には自信がつくが、それができない。」といった由の手紙を書き、富夫はついに軍を脱走しようとする。この脱走の際、「ロビンソンクルーソー漂流記」が想起されているのは興味深い。この物語は二八年間にもわたる漂流の物語であるが、結局は元の地に戻り、再婚するも妻との死別のあと、再び冒険に出るものだ。

聖書を読むことで心の安らぎを得ること。捕虜や蛮人たちとの出会い。自らの帰属を失つた土地での闘いの日々。こうしたエピソードから、富夫がこの物語を想起することは理解出来る。しかしながら、富夫が逃亡しつつこの物語を想起するのは非常に逆説的な姿なのだ。なぜならば、彼もまた三日後には元の場所に連れ戻されるからだ。

私は病院の中で自分の居場所がわからないままであつたが、病舎のかけにかくれていた。とつぜん犬の吠える声きいた。犬がとびかかる前に私は三人の兵隊につかまへられた。伊藤と隊長ともう一人私の知らぬ兵隊であつた。犬をつれていたのはいうまでもなく憲兵であつた。(192)

富夫の越境を阻んだものは、またしても「犬」であつた。「犬」は常に富夫を境界の位置に封じ込める存在だ。そして、言うまでもなく、その後再び与えられる「被服」は、富夫が軍に戻される象徴である。

その後の反省文では、日々謝罪する対象が増えてゆくことに

なるが、それはこれまで描かれてきた組織と個人との関係を象徴しているとも言える。また、この反省文が、本人の申し出により英語ではなく日本語で書かれていることも重要だ。それが、反省文であろうが、日記や手紙であろうが、勅語の様なシニフィエであろうが、全ての「意味」は発話や書記行為の後に発生する。反省文は、日本語で書かれ上官に読まれることによって「反省」の意味が発生する。そして、その書記行為は上官の命令によってなされているわけだから、それはある意味「ゆるす」ために書かされているのである。

富夫には永遠に外部などあり得ない。

7 家族／軍隊

日本の戦後の天皇を象徴とした政治システムは、家族の比喻によって可視化されている。国家にとって家族とは租税の基本単位でもあり、天皇が家族として象徴されることは、双方を家族という比喻によって重ね合わせることを可能としている。

そして、それは戦前の軍も同じであった。軍が全体から小師団に至るまで何重にも入れ子状になった家族の比喻によって支えられていることは、このテクストの様々な部分から容易に読み取れるであろう。だが、物語の語り手である富夫にとって、入隊それ自身が、日本人になるための行為であり、それは家族を「喜ばせる」ためのものであった。

立ちどまると、私の妹がいった。

「それでは兄さん、気をつけてね」

「ああ、気をつけて行くよ」

「でも、気をつけるって、どういうことかしら」

「それはそうだな」

と私はつぶやいて笑った。

(7)

物語は、入隊前の家族との別れの場面から始まる。戦争を描いた物語ではこれが今生の別れとなることが常であるが、この物語では、家族そのものが内地にいるわけでもなく、またこの「私」自身の帰属自体が常に問題となる存在である。それは、外地に居る中国人という、これもよく描かれ続けた被支配者像ですらない。明らかに欧米人に見える日本人が外地において日本の軍隊に入るといふこの物語は、あらゆる帰属を拒否し続ける物語であるとも言える。また、この「私」(＝富夫)に帰属を与えようとはしない世界から富夫が自己証明のためにどこまで奔走しようとも、決して外部に出ることが出来ない物語でもある。

富夫が「あこがれ」と呼ぶ妹への心情は複雑であるが、そうであるが故に明確に語られることもない。ただ、母親にも他の女にもない感情であると述べられることにより、差別化されている。

妹と母そして床屋の後夫は、見るからに日本人の家族である。だが、息子の姿に己を捨てた前夫の姿を見出してしまふ母、異

質なコミュニケーションの中でも妻と前夫の間に出来た子を養おうとする床屋（義父）らとの溝は深まる一方であるが、妹には不思議な愛着がある。

お互いに人間といいながら、どこか、あまりに違いすぎるところがある。私はその夜寮にもどつてから、寮生と顔をつきあわせていて、自分の中には、ああしたもののが、どこかにひそんでいるのではないかと今更のように思いました。ことによると、自分は日本人の血を受けていることを、誰かに見やぶられているのではないだろうか。（13）

富夫の日本人に対する感情も複雑である。家族あるいは妹は、日本人であることを肯定的に想起させもするが、出会う日本の軍人たちの姿は、自己の日本人の「血」への嫌悪を生み出す。そんな富夫は図書館の人類学の本で「日本人」を知ろうとするが、学術的な分類はいかなる「日本人」の像を与えてはくれない。

その姿は、家で見たとのことのある武者絵というものを、私に思っておこさせた。位は軍曹で身だしなみがよかった。私はその瞬間、胸がいたんだ。この男と妹が結婚することを、私は瞬間想像したのだ。

校長は、その紙きれを読むと、うなずいた。（16）

現実に見る日本軍人から受けたこの想像（夢想）も無根拠で

はあるが、後の軍隊生活の中では現実のものとなるものだ。この日本人（兵隊）への嫌悪が妹を通じて感じられている点は興味深い。テクストで描かれる「私」の感情は、常に身体的なそれとして描かれているのだが、ここでの日本軍への嫌悪は結婚による妹の身体への侵犯（性交渉）への忌避として描かれる。これまで述べて来た様に「妹」は富夫の行動原理である。富夫のアイデンティティ追究を支えてこの手記（テクスト）を生み出しているのも「妹」への想いである。この「妹」を含め女達が軍隊というホモソーシャル空間の紐帯となっていることは、村上が指摘する通りであるが、この設定が興味深いのは、軍の上官らと同様に、富夫にとつても「妹」が内部の他者であることだ。

ホモソーシャルな暴力空間において女性には所有可能なそれと、共有されるべきそれに分けられる。そして、その選別は、後者においては慰安婦か銃後の女性かという形で、前者においては、まず血筋の近さにおいて峻別される。つまり、妹である女は通常、「交換」に出される対象となる。だが、この「妹」は直接的な性の対象として妄想され、結果的にその思いは成就している。このテクストが「手記」である意味を問うのであれば、主として告白すべき対象は、この「事実」であるようにしか思われない。

「いいの、こんなことをしたんですもの、おんなじことよ。私、どれだけ考えたか分つて？ でもこうするより仕方が

ないわ。こうした以上……私はどんなことがあっても、自分の運命を生きられるんだから、兄さんとは違うもの。どんな罰をうけたって、この方がいいわ」

「こんなことをしたから、それだけでも僕は死ぬかも知れない。死んだってこの方がいい銘さ。どうせこれから行くところは地獄だもの。ねえお前たちには、あの世の地獄なんてものないんだろ」

「そうよ。それとも兄さん、あなた、ふるえているけど、そんなことこわいの。そんなふうに教わったの」

「いいんだ、僕はもう日本人だから。どうせ牧師もいなければ、神だつてないみたいなものだから」 (258)

この後、確かに富夫は「日本人」になる。あるいは、「日本軍人」になったと言えはいいか。それは、死への覚悟と言い替えてもいいかもしれない。だが、このテキストは明らかに、死んではいないからこそ書かれている。その意味では、「死ぬなかつた」物語ではあるのだが、少なくともこのテキストは最後まで、その様な主題としては読めない。

テキストは終盤のレイテ島玉砕において「外部」としての「死」が繰り返して現れる。確かに、「死」は究極的な「外部」として機能している。だが、物語は、以下のように閉じる。

「おれは日本人ではない。おれはアメリカ人でもない」

発砲の音がした。それから英語がきこえてきた。私はけん

めに服をぬこうとしたが、もう自分の皮膚しかなかった。 (318)

これまで述べて来た様に、このテキストは、何度も「外部」への脱出が試みられるが反転し、元の「内部」に引き戻される物語である。「服」はかつて「軍」の象徴であった。そして「軍」は富夫にとって「日本人」になることそのものだった。

確かに妹との情交により富夫は「日本人」になれたと思った。だが、妹は富夫とともに「外部」に逃げようとはしない。富夫がなることが出来た日本人は「死」にゆく存在である。だが、苛酷な戦場の現実には、「死」という「外部」すら簡単には与えてはくれない。

もちろん、こうした「現実」は「戦場」という「例外状況」によるものである、という視点はあり得る。だが、これが「手記」であるという設定は、それが語られている時点の「現実」を読者に突きつけてくる。それは、ピンポイントとして語れば、日米安保をめぐる社会状況が想起されるが、日本がおかれている「アメリカ」と何かの狭間という状況は今もあまり変わらない。もし、我々が「日本人ではない。アメリカ人でもない。」と叫ぶのであれば、それらを自らの「外部」として脱ぎ捨ててしまえばいいのか。だが、そうやって全てを脱ぎ捨ててしまった後、我々は何を脱ぎ捨てればいいのか。

手記という言葉によって封じ込まれた浜中富夫は、テキスト「墓碑銘」は、永遠の「内部」である。そして「外部」になる

うとする読者によって何度でも召還される。もちろん、作者自身によつても。だが、読者にとつての読むことは、作者にとつての書くことは、再び「内部」に闖入し、それを微分化し、「内部」を精緻化、拡大化してゆくことなのだ。テキストには外部など存在しない。その気づきこそが、『墓碑銘』を『寓話』に、そして『残光』へと導いてゆく。

*『墓碑銘』の引用は、『小島信夫長編集成』第二卷(二〇一五年一月)によつたが引用文のページ数は、参照の便を考え講談社文芸文庫のものを掲載してある。

注

- (1) 小島信夫『墓碑銘』の初出は『世界』一九五九年五月〜六〇年二月、同年に中央公論社から刊行。
- (2) 江藤淳「文芸批評(昭和三四年一二月)」「全文芸時評 上巻」一九八九年。
- (3) 千石英世「私であることのはじまり——『墓碑銘』」「未完の小島信夫」水声文庫、二〇〇九年。
- (4) 村上克尚「動物の声、他者の声——日本戦後文学の倫理」新曜社、二〇一七年九月。
- (5) 『寓話』初出は『作品』一九八〇年一月〜八一年五月および『海燕』一九八二年一月〜八五年一〇月、八六年五月〜八六年八月。八七年二月に福武書店から刊行。
- (6) 『残光』初出は『新潮』二〇〇六年二月。五月に新潮社から刊行。